

【 第8回アジア太平洋ろう者競技大会を振り返って I 】

本大会において決勝戦当日の朝、日本は実力的にまだアジアで3位以内には入っていないのに、なぜ決勝という舞台までたどり着けたのかを予選リーグのイラン戦をビデオで確認しながら考えていました。その時、今の選手状態を考えるとイランを倒せるのではないかという感覚になったのを強く覚えています。それぐらいいいチーム状態で決勝を迎えることができました。大会前から周囲の声とは別に、自分自身は2連覇する、優勝するとは一言も触れてませんし、正直、言えませんでした。昨年11月にイランで開催されたアジア太平洋ろう者サッカー選手権を経験して、それほど他の国との実力の差を感じていたからです。現実的な目標として「3位以内に入りデフリンピック出場権を取ることに」重点に合宿を行い、本大会でも1試合1試合集中して戦ってきました。そのような中で今回のコラムでは、イタリアで開催される来年のワールドカップへ向けて何をすべきかを考えながら本大会を振り返ってみたいと思います。まず、先述のとおり、本大会目標は「3位以内に入りデフリンピック出場権を取る」という明確な目標を立てました。そうした目標を成し遂げるために一番大切にしたのはチームの「和」です。その一歩として本大会前に非常に大きな決断をしました。代表チームとして18名の少数精鋭で戦い抜く。しかし、2日に1回45分ハーフの試合があり合計5試合を行います。その点から怪我や警告累積などの心配の声がかなりありました。しかしながら、この選手達は必ずやれる・戦えるという自信を持っていました。挑戦者という立場を意識し1試合1試合を全力で戦い抜くことだけを考えて毎試合準備しました。チームはほんの少しのことで乱れることもあります。逆にほんのちょっとしたきっかけでまとまることもあります。こうした「対立」と「和解」をくり返していくことで、少しずつ団結力や一体感が育まれていきます。大事なことは、仲良しごっこで終わらせずに自分の考えを伝えあうことです。時には真正面から衝突することも、お互いをわかりあえるためには必要でしたが対立は怖いものです。私としてはチームとして団結し、成長するためにも、そうしたぶつかり合いこそが大切な要素だと感じそうした争いをさけて、当たりさわなく付き合っても、逆にストレスを抱えてしまい、本当の意味で、お互いを理解し合うことはできません。何よりも意見と意見がぶつかり合い、お互いが言いたいことを言うことが大切です。悪いことに見えたとしても、その衝突が生み出す財産は大きいです。「雨降って地固まる」ということわざがあるようにケンカやぶつかりあいという雨が降ることで、お互いのことが分かり合え、チームの地盤が固まります。これは「デフリンピック出場権を取る」という明確な目標の為に、主将の「細見」と3人の副将「松元」「桐生」「古島」が選手の意見を聞きピッチ外でもチームを上手くまとめ、選手間の意見の相違を力に変えたことが最大の要因ではないかと考えます。また、日本代表として海外の強豪チーム相手に自分たちの戦い方をするためには、最低限相手に対抗できるようにする必要がありました。この部分は限られた時間の中、意識を持って「個」を高めるトレーニングをしていかなければ身につけていきませんが、実際に仕事や家庭や学校などある忙しい生活の中しっかりと準備できている選手が多く、現地での最初の練習時に手ごたえを強く感じたことで、初戦が本当に待ち遠しかったのです。